九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2020

所　　属：　人文学部心理臨床学科

名　　前：　　和田　由美子

作成日：2020 年 10 月 16 日

九州ルーテル学院大学　ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：和田　由美子
所属：人文学部心理臨床学科

1.　はじめに

ティーチング・ポートフォリオとは、「自らの教育活動について振り返り、自らの言葉で記し、多様なエビデンスによってこれらの記述を裏づけた教育業績についての厳選された記録」のことである（栗田, 2009）。土持(2007)によると、ティーチング・ポートフォリオには（1）自らの授業を記録し整理することにより、授業の改善と向上に役立てること、（2）教員の教育活動がより正当に評価され、その努力が報われるための証拠づけとなること、（3）個々の教員の「優れた授業」「巧みな工夫」「熱心な指導」が共有の財産となり、他の教員に還元されることの３つの意義がある。

九州ルーテル学院大学では、2020年度より、専任教員にティーチング・ポートフォリオの作成が義務づけられることとなった。ティーチング・ポートフォリオの作成を通じ、自身の教育活動とその成果を振り返るとともに、同僚諸氏の優れた教育実践を学び、自身の教育改善のための一助としたいと考えている。

２. 教育の責任

私の専門分野は基礎心理学であり、心理学の基礎科目、基礎心理学の科目を中心に、学部の共通教育科目、心理臨床学科の専門教育科目を担当している。大学院人文学研究科では、心理臨床学領域の科目、大学院生の修士論文指導を担当している。その他、学部のアドバイザーとして学生の各種相談に応じているほか、認定心理士・公認心理師の科目履修・資格申請指導も担当している。

2.1. 授業科目の担当

2018 年～2020 年度の 3 年間の担当科目は以下のとおりである。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
心理学	2018-2020 前期	平均 70 名	共通教育選択
フレッシュマン・ゼミ	2018-2020 前期	11～14 名	共通教育必修
心理臨床学の基礎	2018-2020 後期	平均 70 名	心理臨床学科 専門必修

心理学概論	2020 前期	平均 70 名	心理臨床学科 専門必修
行動科学概論	2018 後期	68 名	心理臨床学科 専門選択
神経・生理心理学Ⅰ （生理心理学）	2018-2020 前期	平均 60 名	心理臨床学科 専門選択
心理学実験 （心理学実験･実習）	2018-2020 後期	15～25 名 （1 班あたり）	心理臨床学科 専門選択
学習・言語心理学 （学習心理学）	2018-2020 前期	平均 60 名	心理臨床学科 専門選択
心理学研究法	2018-2020 後期	平均 60 名	心理臨床学科 専門選択
心理学外書講読Ⅰ	2018-2020 前期	平均 20 名	心理臨床学科 専門選択
心理学研究演習	2020 前期	６名	心理臨床学科 専門選択
特別研究	2018-2020 後期	6～10 名	心理臨床学科 専門必修
卒業研究	2018-2020 通年	7～13 名	心理臨床学科 専門必修
生理心理学特論	2019 前期	４名	人文学研究科心理 臨床学領域選択
研究指導	2018-2020 通年	２名 (M1・M２：各１名)	人文学研究科 領域共通科目必修

共通教育科目では、初年次教育の「フレッシュマン・ゼミ」、人文学科対象の「心理学」、心理臨床学科では、「心理学研究法」、「心理学実験」等の心理学基礎科目、「神経・生理心理学」、「学習・言語心理学」等の基礎心理学分野の専門科目を担当している。大学院では、心理臨床学領域の「生理心理学特論」を隔年（夜間開講）で担当している。「研究指導」では 2018～2020 年度の間に毎年 1 名、通算 4 名の社会人大学院生の修士論文の指導を担当している。

■　主要担当科目

「心理学研究法」

心理臨床学科の２年生を対象とした科目である。心理学が研究対象とする「心」は、

直接見たり測ったりすることができないため、通常の自然科学の方法論をそのまま適用できない点も多い。この講義では、科学的研究の基礎を学ぶと同時に、心理学研究を行う上での留意事項、心理学において発展してきた独自の方法論、人を対象とした研究を行う上での研究倫理について学び、３年次の特別研究、４年次の卒業研究に備えることを目的としている。

「神経・生理心理学 I」

心理臨床学科の２年生を対象とした科目である。脳神経系の構造と機能に関する基礎知識は、心理学研究を行う上でも、心理師として医療従事者と連携した支援を行う上でも必要不可欠である。この講義では、脳神経系の構造と機能と、これまでに明らかにされてきた心と行動の神経生理学的メカニズムについて概説し、「心」と「身体（主に脳)」の間に、どのような相関関係、因果関係が見られるのかについて考察する。

「学習・言語心理学」

心理臨床学科の２年生を対象とした科目である。学習心理学とは、経験によって行動や認知が変容する仕組みを明らかにし、それらの知見に基づいて行動や認知の予測と制御を目指す学問領域である。言語心理学は、言語表出や言語理解など言語に関する心理的側面を取り扱う学問領域であり、学習心理学や認知心理学と共通する部分も多い。この授業では、学習心理学の基礎理論とその応用、および言語理解と言語習得の機序について概説している。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

■ 出張講義

2018 年 10 月 18 日の熊本県立玉名高等学校での出張講義

「感情心理学入門－涙の不思議－」

ひとはなぜ泣くのかについての心理学の知見を紹介・解説した後、小グループでのディスカッション、グループの意見発表・意見交換を行なった。

2019 年 8 月 23 日の熊本県立天草高等学校での出張講義

「ひとはなぜ泣くのか」

感情による涙を流すのは人間だけだと言われている。ひとはなぜ泣くのか、動物行動学者ティンバーゲンの４つのなぜに基づいて、心理学の知見と自身の研究成果を紹介した。

■ 教員免許状更新講習

2018 年 8 月 8 日、および 2020 年 8 月 7 日　こころの問題へのアプローチ

～幼児・児童・生徒への支援と教師のメンタルヘルスでの講義

「感覚と認知の個人差：理解と支援」
感覚過敏の事例、記憶の仕組み、記憶の個人差等について紹介し、具体的な事例、対応策等について、意見交換を行なった。

■　非常勤講師

放送大学熊本学習センター　面接授業「心理学実験３」
心理学の基礎的な実験（囚人のジレンマ、ストループ効果、逆向抑制）の実習
福岡県立大学人間社会学部人間形成学科　集中講義「比較心理学」（～2020 年度）
動物と人間の心理・行動の進化的な連続性、特異性についての講義

2.2. 教育組織運営

科目担当者として学生の教育にあたるほか、心理臨床学科の 2017 年度入学生（現４年次）、2019 年度入学生（現２年次）のアドバイザーとして、履修指導、進路指導、その他学生の各種相談に随時応じている。また、学務・入試センターと連携して、認定心理士（日本心理学会認定資格）の履修・申請指導、および 2017 年以前入学者（在学生・既卒生）に対する公認心理師学部基礎資格取得（特例措置）の履修・申請指導を行なっている。2018 年度は FD・研究委員長として、教育改善のための学内研修会、学内教職員に広く授業を公開し相互に授業参観を行う授業参観ウィークの企画・運営を行なった。

３．教育の理念

私が専門とする基礎心理学では、応用や臨床実践を直接的な目的とはせず、研究を通じて人間の心と行動についての「新たな知見を見出す」ことを目指している。新たな知見を見出すためには、（１）**既存の知識の体系的な理解**、（２）**未知の知に挑戦しようとする知的好奇心**、（３）**新たな知を産み出すための方法論の理解と実践**、が必要となる。これらは、日常生活、社会生活を送る上で必要とされる「ジェネリック・スキル（generic skills）」でもあり、大学４年間の心理学教育・研究活動を通じて、学生がこれらのスキルを伸長していけるよう心がけている。

3.1. 理念１　既存の知識の体系的な理解

学術情報のサーチエンジンである Google scholar のトップページに「巨人の肩の上に立つ」との文言があるが、新たな知見を見出すためには、先行研究を俯瞰し、これまでの研究の問題点やまだ明らかにされていないことを洗い出す必要がある。また、心理学の先行研究をしっかり理解するには、神経科学、統計学、学習理論等に関する基礎的知識が必要である。学生にとって退屈な面はあると思うが、応用的な内容に入る前に、心理学とその関連領域の基礎知識、既存知識をしっかり教授することが大切だと考える。

3.2. 理念２　未知の領域に挑戦しようとする知的好奇心の涵養

未知の現象を「知りたい」「理解したい」という知的好奇心の強さは、研究を牽引する原動力である。現在進行形で進んでいる様々な研究の現状を見せること、自分自身で研究に従事させることで、多面的・多角的な知的好奇心が涵養されると考える。

3.3. 理念３　新たな知を産み出すための方法論の理解と実践

大学で学ぶ醍醐味は、既存の知識を習得するだけでなく、自身で新たな知を産み出すための研究活動に従事できることである。心理学研究では、実験法、質問紙調査法、観察法、面接法など、独自の方法論に基づいた心理・行動データの収集や、収集したデータを分析するための統計学的手法の習得が必要不可欠となってくる。これらデータ取得・分析スキルは、大学卒業後の日常生活、社会生活においても活用可能なジェネリック・スキルであり、特に重点的に教育すべき内容と考えている。

４. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

４.1. 知識教授型授業による既存知識の効率的な習得

近年、知識教授型、詰め込み式の教育が批判され、グループワークやディベートなどを用いたアクティブ・ラーニングが推奨されている。しかし、学問の知識に乏しい学生が能動的に学習を進めていけるようになる前の準備段階として、まずは一定量の知識を効率的に詰め込んでいく必要があると考える。そのための方法として、一部の授業（「神経・生理心理学 I」など）では知識の習得を最優先課題とし、毎回の授業終了後の課題として復習問題に回答させることにより、知識の確実な定着を図っている。

４.2 現在進行形の研究情報の紹介

学生の知的好奇心を高めるために、授業の中では国家試験で出題されるような「確立した知見」だけでなく、学会等で取得した現在進行形の研究情報も紹介するようにしている。また、授業内容だけでは飽き足らない学生のために、任意の「事後学修」として、論文、website、動画等を提供し、刺激的かつ新しい学術情報の提供に努めている。

４.3. 体験的・実践的な学び

研究の方法論を理解するには、まず自分でデータ収集と分析に取り組んでみることが大切である。「心理学実験」「心理学研究法」で基本的な方法論について学習した後は、「心理学研究演習」や「特別研究」などの実習・演習系の授業を通じて、「卒業研究」の前に学生が自ら研究実践を積む機会を設けている。

５. 教育改善のための努力

5.1. 改善努力１　授業評価アンケートと授業改善報告書

2019 年度の「神経・生理心理学 I」の「授業に集中できる雰囲気でしたか」との設問において、平均値（4.5）を下回る評価(4.2)を得た。授業の性質上、知識教授型で詰め込み式にならざるを得ない面があり、学生の集中力が切れて一部に私語をする学生がいたことが原因と思われる。私語については厳格に対応するとともに、学生が飽きずに授業に集中できるよう、一定の双方向性を保つための工夫を行なっていきたい。

また、2019年度の「心理学研究法」において、「グループ・ワークやディスカッションの機会があった」の得点(2.2)が平均(2.7)を下回った。グループワークやディスカッションの機会を設けるべきか否かは、教育目的に依存するが、この授業では取り入れ可能と考えられる。2020年度は遠隔授業のため、Moodle上に質疑応答とディスカッションのスペースを設けている。

５.2. 改善努力２

「心理学実験」「心理学研究演習」のように、課題としてレポートを課す授業では、採点後のレポートを返却しているが、採点に時間を要し、レポートの返却が遅れがちである。教育効果を考えた場合、フィードバックの遅れは望ましくない。返却速度を上げるために、回数は減らさずに簡単に添削するか、丁寧に添削するためにレポートの提出回数を減らすか、あるいはその混合か、いずれかの対応をとる必要がある。

6.　教育の成果・評価

いずれの担当科目においても、ほとんどの項目で平均より高い評価を得られていることから、授業については一定の水準を満たしているものと考えている。

知識教授型のスタイルで実施している「神経・生理心理学 I」では、前半で脳神経系の機能と構造について、知識を身につけるタイプの講義が続くが、学習を重ねて知識のピースがつながりはじめると、神経科学関連の研究報道や TV 教養番組への興味関心が広がっていくようである（受講学生のリアクションペーパーより）。

「心理学」「神経・生理心理学 I」「心理学研究法」などの授業では、成績評価に関連する事後学習課題とは別に、授業 HP や Moodle のページから学術論文、website、動画等のリンクを紹介している。やる気のある学生は毎回学術論文にもしっかり目を通し、能動的に学習を進めている。任意の事後学修の提供は、学生の知的好奇心の涵養に一役買っていると考えられる。

また、卒業研究については、ゼミ生の 3 分の 1 程度が、ほぼ自力で研究計画立案、データ

収集、結果の分析を行なえる力を身につけており、2年次の「心理学実験」「心理学研究法」、３年次の「特別研究」での教育の成果を感じている。

７． 今後の教育に関する課題と目標

2019 年度からすべての講義室で WiFi の使用が可能となり、web を介した授業中の質問受け付けやリアルタイムでのアンケート実施ができるようになった。また、2020 年度からは遠隔授業システム Moodle が導入され、学生との間で簡単にファイル共有等を行えるようになった。しかし、Moodle の機能をまだ十分には理解しておらず、授業に活かし切れていないのが現状である。今後はこれらを用いて、より双方向的な授業を展開するとともに、学生の知的好奇心を刺激できるような学術情報の提供に努めたい。

8. 参考資料

（１）2019 年度担当科目シラバス例：

「心理学研究法」「神経・生理心理学 I」「学習・言語心理学」

（２）2019 年度授業評価アンケート結果の例：

「心理学研究法」「神経・生理心理学 I」「学習心理学」

9. 引用文献

栗田佳代子（編）（2009）評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書「日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題 ―ワークショップから得られた知見と展望―」大学評価・学位授与機構

土持ゲーリー法一（2007）　ティーチング・ポートフォリオ 授業改善の秘訣　東信堂